

Preformed C1q結合性DSAと腎移植後グラフト機能に関する検討

岡部, 安博

<https://hdl.handle.net/2324/4110420>

出版情報 : 九州大学, 2020, 博士 (医学), 論文博士
バージョン :
権利関係 : (C)2018 Elsevier Inc. All rights reserved.

(別紙様式2)

氏名	岡部 安博			
論文名	Preformed C1q-binding Donor-specific Anti-HLA Antibodies and Graft Function After Kidney Transplantation			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	江藤 正俊
	副査	九州大学	教授	二宮 利治
	副査	九州大学	教授	園田 康平

論文審査の結果の要旨

腎移植後新規の補体結合性抗ドナーHLA抗体(de novo C1q+DSA)は移植腎機能不全のリスク増加に関連があることが報告されている。しかし、術前既存の補体結合性抗ドナーHLA抗体(Preformed C1q+DSA)に関する情報はほとんどない。この研究ではPreformed C1q+DSAと移植腎の中期的な成績との関連について検討した。

方法は2010年4月から2016年10月までの44人のDSA陽性患者を後方視的に検討した。そのうち36人が腎移植を受けた。17名はPreformed C1q+DSAであり、27名は補体C1q陰性のDSA陽性患者であった。2つのグループで臨床的な関連因子について検討した。

結果はPreformed C1q+DSA陽性患者では有意に輸血歴が多く(53.0% vs 18.6%; $P=.0174$)、CDCクロスマッチ陽性率が高く(29.4% vs 0%; $P=.0012$)、DSAのmedian fluorescence intensity(MFI)が高かった(10,974 vs 2764; $P=.0009$)。CDCクロスマッチで除外されなかった腎移植患者ではC1qが陽性でも陰性でも、腎生検による累積拒絶反応陽性率(32.5% vs 33.5%; $P=.8354$)、累積移植腎生着率、3ヶ月、12ヶ月のプロトコール腎生検結果に有意差は無かった。しかしPreformed C1q+DSA陽性患者では移植腎機能発現遅延(delayed graft function: DGF)の頻度が有意に高かった(54.6% vs 20.0%; $P=.0419$)。多変量解析ではC1q結合性($P=.2377$)ではなく、DSAのMFI値($P=.0124$)がDGFに対する独立したリスク因子であった。以上のように本研究はCDCクロスマッチ陰性患者では、Preformed C1q+DSAが陽性かどうかは抗体関連型拒絶反応の発生率や中期的な移植腎成績とは関係なく、Preformed C1q+DSA陽性の有無はDSAのMFI値とCDCクロスマッチ陽性率とに強い相関があることを示した。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。

本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについてもほぼ適切な解答を得た。よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。